

川縁から（２）

前回は、どの様に「川縁」に近づくのか。または、「川縁」に近づくにあたっての「心構え」をどの様にすればよいのか。「何をすれば良いのかは、分からない」「無事に渡り切る事を願うしかない」と投げやりに終わった。

ちなみに、この文章から読まれた方へ。「川」とは、現世一来世間の境界河川のことであり、「縁」とは、現世側の最終ライン。片足でも「川」に踏み入れば、不可逆的に現世から離別したと定義されることになる。

「川縁から」考えることは、（１）「現世からの離別」と「望む来世への担保」がセットとなった心理状態であれば、心配はないが、（２）「現世からの離別」と「望む来世への保証が全くない」セットとなると、大変心配である。その上（３）「現世からの離別」と「望む処ではない来世が確実」であれば、回避や逃避の心理は必然となる。

上記セット（１）～（３）の左辺は、何れも「現世からの離別」で共通している。これは、遅かれ早かれ、どなたであっても避けることはできないし、皆が承知しているであろうが、右辺は、多くの日本人が、その人の「生き様」によって左右され、人間様ではない「天」や「神」や「仏」によって決められると考えられているのではないだろうか。

では、どのようなタイプの方がそれらに相当するのか。勝手ながら、分析してみた。

【セット（１）】自ら意識せず（気付かず）に「徳を積む」行為が重なり、何も欲はなく「お迎えが来る日」に備え、「生きているのではなく、生かされている」と、毎日をただただ「ありがたい」と感謝の気持ちを持ち続けて、過ごしていらっしゃる方なんだろう。

【セット（２）】「望む来世への保証」を得ようと、自ら意識して「徳を積む」行為を重ねている（つもの）方。見方を変えれば、それさえも「欲」に支配されているということになり得る。知らず知らずのうちに「欲望の奴隷」となっているのであろう。自分自身（筆者）はこのタイプに相当すると自覚している。

【セット（３）】本人以外からは、早急な「現世からの離別」を望まれているのだが、なかなか順番が回ってこない「現世滞留者※」に相当。本人以外の方々や環境に「多大なご迷惑やご心配をおかけしました」方であり、当人は全くそのことに気付いていないか、気付いていながら、一連の行為を自己正当化してしまう方。

「現世滞留者※」（定義等の詳細は「鯨のネタ・鯨のネタ（V o 1. 1）」ページより「虹の架け橋建設法（案）強行採決される」の件を参照願います。）

自分自身にとっての「川縁」とは、いったい何なんだろうか。「川縁から」の風景は、どのように見えるのだろうか。そこでは、いったいどんな心境になるのだろうか。